

竹田権兵衛勸進能

前西芳雄

元祿四年の秋、京都に於いて金春（竹田権兵衛）が勸進能を興行し、呼び物の関寺小町は「鼓に障る事有て」変わったが、四日間の棧敷を売りつくす盛況であったことは、井原西鶴の『世間胸算用』巻三「都の白見せ芝居」に書かれ、つとに知られている。

竹田家は金春の分家で、初代安信が元和九年、京住のままで加賀藩に召し抱えられた家である。加賀藩の能に就いては、この勸進能（の権兵衛を広貞とするが広富が妥当）の消息も含めて、梶井幸代・密田良二氏共著の『金沢の能楽』に詳しい。

二代目の竹田権兵衛広富は元祿三年の十一月、来四年八月初め頃に、京都で一代能を興行したい旨、金沢奉行所に願ひ出た。藩は翌四年五月四日正式に許可を与えるとともに、装束類四十余点の新調と、三十数点の修復の代として、銀八貫八百余を支給している。この時小鼓を勤めたのは、多く清五郎の弟子であるが、清五郎と権兵衛は含む所があり、日限間近になって支障を言いかげられ、たっ

て望んでいた関寺小町は、勤められなかったようである。青蓮院境内、三条白川橋の畑地を借りての興行は大成功で、入場者二万四千人、五十四間の棧敷を売りつくし、借銀を返済して尚、三十貫余の利をおさめたと、『金沢の能楽』に述べられている。

これ程の勸進能でありながら、秋というだけで、その月日や四日間の番組については全く判らず、梶井氏も金沢にある藩の資料をあたられたが、結局不明のままになっていた。ところが先頃、京都市在住の山上六郎氏より見せていただいた多くの番組書付の中に、この勸進能の番組の一部と思われる一枚が含まれていた。

この番組は、冒頭に元祿四年末九月十五日・十六日・十八日・十九日と大書したあとに、津崎清左衛門・伴次右衛門・伊東八十郎・森川八郎右衛門・真野五郎左衛門・堀源左衛門・萩原孫三郎・皆山源兵衛・松原三郎兵衛の九名の名を列記し（堀は脇方春藤流の役者であるが他は金春流の役者であり、地謡の連名と

源之丞
放下僧 七郎兵衛 八郎右衛門 長左衛門
間 利左衛門 次郎兵衛

ふせない経 佐太夫

半平
狸々々 長右衛門 孫兵衛 山三郎
又三郎 辰之介

この番組に対する註記とも見える形で、終りの方左端部に「九月廿五日」とあるが、これは本来つづいてもう数枚の紙が接続していたもので、次に書かれていた番組の日付ではないかと思われる。

右の番組が、竹田権兵衛勸進能の時のものと思われる理由としては、年月と場所が一致し、日も四日間であること、シテが権兵衛親子を始め金春流であり、地謡方も金春流であること、囃子方も加賀(京住・國表)の役者が多いことが挙げられる。シテについてのみ言えば、「菅刈」の長七だけは不明であるが、「楊貴妃・柏崎・盛久」を舞った権兵衛は、初代安信の養子の二代広富で、貞享四年に権兵衛を襲名し当年42才であった。「碓潜」の庄五郎は、広富の養子広貞で当年19才、後に三代目を嗣いだ。「葵上・三輪・放下僧」を舞った源之丞は、権兵衛の弟子で、京住のまま尾張藩お抱えだった田中源之丞である。「賀茂・狸々」の半七は、田中源之丞の子で同じく尾州お抱え、後宝生流に変わっている。「現在鶴」の吉之丞は、田中源之丞の弟

子の安田吉之丞である(以上『能之図式』の役者付などによる)。

以上のような理由から、竹田権兵衛勸進能番組の一部に間違いないと思っていたが、その後『芸能史研究』53号(昭和51年4月)に、西野春雄氏が「藤田家蔵・古今稀曲集」を翻印されるに及び、傍証的なものを得た。

元禄四年辛未智恩院西の門石ばしの西北の方に金春権兵衛一代能に碓潜有

金春庄五郎
碓潜

平吉 理兵衛
傳次郎

と、同書の中にあるのがそれである。書き方は異なるが場所が同じであり、右番組の二番目に庄五郎が「碓かつき」を演じているのと合致する。囃子方に異変があるのは、予定と実際の演者の違いとみることが出来よう。「碓潜」は当時金春太夫は演じておらず、いわば竹田家独自の能であった。晴れの勸進能にそれを持ち出したのであろう。

わずか一日分の番組の点は残念であるが、日時すら不確実であった竹田権兵衛勸進能の、具体的な記録としては唯一のものと思われるので、紹介してみた。「狸々」で結んでいるところをみると、四日目の番組であろう。

この稿を成すに当って表章氏より多くの御教示をうけました。厚く御礼申し上げます。

(まえにし)よしを 京都繪書店勤務)